

三重の「国登録有形文化財」から

ノスタルジーを求めて

モダン、ポストモダンと新たなものを追いかけてつづ、日本の古き良き伝統もたくさん残っていた昭和。平成を経て令和も4年目——。今や昭和は懐かしい時代となりました。そのノスタルジーを探して、三重県各地の建物を訪ねました。今回は、文化庁が定める「国登録有形文化財」の中から昭和初期の建築を中心に紹介します。

取材・文……中村元美・堀口裕世
 撮影……梅川紀彦・尾之内孝昭・中村元美
 ただし※印の写真は取材先から提供していただきました
 *各登録有形文化財の開館日時・受け入れ方法・料金などはそれぞれに異なり、変更になる場合もありますので、必ず事前にご確認ください。



武士の魂を宿す品々が鎮まるモダンな館

楽翁公百年祭記念宝物館(鎮國守國神社)

〔桑名市吉之丸〕

桑名城跡に造られた「九華公園」。その本丸跡に鎮座する「鎮國守國神社」は、江戸時代初期の城主・松平定綱公(鎮國公)と、江戸後期の城主・松平定永公の父である松平定信公(守國公、楽翁公)をお祀りしています。

宮司の嵯峨井和風さんに、境内に立つ「楽翁公百年祭記念宝物館」へご案内いただきました。瓦の屋根を載せ、正面に小さな切り妻の破風がある和風な造りと、車寄せの石張りの柱や星形の照明など洋風な意匠が混在した建物です。「昭和3(1928)年に行われた定信公の没後百年記念祭を機に建設され、昭和9(1934)年に完成しました。鉄筋コンクリート造り2階建てで、和洋折衷の当時としてはモダンなスタイルです。中には、定信公や定永公などのゆかりの

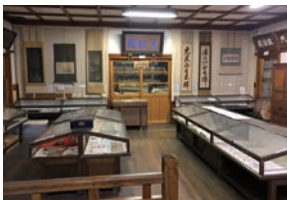
品々が収められています。平成20(2008)年に「国登録有形文化財」に登録されました。

定信公は、老中首座として寛政の改革を行い幕府の財政再建に成功するなど、多方面で手腕を振るい敏腕で知られた名君。鎧や刀剣など武士らしい品々の他、舞楽の面や本の版木、定信公自筆の文書などさまざまなものが展示され、文武両道に秀でた定信公のお人柄が偲ばれます。

「洋学や自然科学にも関心が深かったよ」うで、天球儀なども残されています。明治維新時には無血開城し、第二次大戦では空襲を免れたため、多くのものが引き継がれて幸いでした。定信公生誕200年にあたる昭和33(1958)年に改修を行っています。来る没後200年祭に向

けても改修を考えています。現在は毎年5月の「金魚祭」の時期にだけ公開しています。

進取の気性に富んだ定信公にふさわしい、当時最先端の建物。境内には桜や菖蒲など花の見所も多く、その時期はライトアップも行われます。花の季節にゆったり訪ねたい場所です。



展示室内部



鎮國守國神社 本殿



黄色い提灯が華やかな境内

お問い合わせ

鎮國守國神社

TEL 0594-222-2238

※印の写真は取材先から提供していただきました

ギリシア神殿のような石柱が並ぶ大門のランドマーク

オーデン大門ビル



【津市大門】

「オーデン大門ビル」

津市大門の商店街に立つ「オーデン大門ビル」は、石貼りで仕上げられた重厚な二階建て。正面には柱頭がぐるりと渦を描くイオニア式のギリシア神殿のような柱が4本並び、中央の入口の上部には、ペディメントという切り妻屋根

を模した三角形の装飾を持つなど、古典的な意匠が目を引きまします。

昭和3（1928）年に旧四日市銀行津支店として建てられ、95年におよぶ長い間、大門のランドマークとして人々に親しまれてきました。銀行、保険会社、

画廊、毛糸店として使用され、現在は1階が津市の子育て支援センターになっています。



1階内部

現在のおーナーである「株式会社オーデン」の代表取締役・横田毅さんにお話を伺いました。

「昭和59（1984）年に私の父がここを買い、毛糸店を開いていました。戦争を乗り越えてきた建物ですので、「銀行だった頃、ここに勤めていた」『近所に住んでいて、戦争中荷物を預かってもらった』など昔の思い出話を聞くことも多く、たくさんの方の思い出詰まった建物なのだと思えました」。



金庫の頑丈な鉄の扉

第二次世界大戦時、津市の中心部は大

規模な空襲を受け焦土と化した歴史があります。その中で、この付近で焼け残ったのはこのビルを含めた3つの建造物だけでしたが、今では他の二つの建物もなくなり、戦前から残る唯一のビルとなりました。

「古い記録がなくなっていて、建設時の詳細が分からなかったのですが、建築家の大森尚子さんをはじめとする、みえへりテージマネージャー（地域歴史文化遺産保全活用推進員）の皆さんが調査してくださり、小笹徳蔵の設計で昭和3（1928）年に『清水組（現清水建設）』が建てたことなどが判明しました」。

この調査を機に文化庁に書類が提出



調査の際描かれた正面図

され、平成28（2016）年に「国登録有形文化財」に登録されました。

「このとき、それまで閉じたままだった二階の窓のシャッターを開けられるようにハンドルを作ってもらいました。スチール製のシャッターは頑丈で重いものですが、カムの構造などは全く壊れておらず、力は要りますが、昔と変わらず開閉することが出来ます。昔、若い銀行員さん達が、毎日勢いよくこれを上げ下げしたという話も聞いたことがありますよ」。

現在、2階は使用されていませんが、夕暮れ時、窓に灯が点ると、装飾のロマンチックさが際だって、華やかに人々が



シャッターのカムは今も健在



窓に灯が点ると一層ロマンチック

集った往時が偲ばれます。

「画廊をされていた『斉藤商会』さんから父がこの建物を譲り受けたとき、斉藤さんが親交のあった川喜田半泥子さんから『このビルは価値があるから残すように』と言われたことを聞いたそうです。ですので、父も私もなるべく建物の外観などを変えないよう努めてきました」。

年月を経たなお味わい深く美しい建築。時代とともに、伝統のある名建築を守っていくという代々のオーナーの思いが重なっているようです。

お問い合わせ

株式会社オーデン

TEL 059-2226-2777

良い材料と優れた技術で造られた元豪商の別邸

割烹旅館 八千代

【松阪市殿町】



八千代 前景 昭和10年頃の写真とほぼ変わらない

松阪市殿町は、城跡の石垣の下に広がる住宅街。古い邸宅の生垣や門が続く静かな町並みです。その一角に立つ「割烹旅館 八千代」は、大正初期創業という老舗料理を主とする料亭で旅館業も行う、今では少なくなった料理旅館です。

「はじめは城跡内、二の丸跡付近に店があったのですが、昭和4(1929)年ごろ、この場所に移ったと聞いています」と

話してくださいましたのは、取締役会長の阪本陽一郎さん。

「ここは、江戸時代には同心町・本殿町などと呼ばれる武家の町でしたが、明治から大正時代に、豊かな商家が土地を買って別邸を建てるのが流行ったそうです。この建物もその一つで、豪商として知られる小津家の分家・小津孝之助という人が建てたものです」。全体に豪商らしい、ぜいたくだが落ち着いた造りで、屋根瓦や欄間などに小津家の家紋「剣片喰」の意匠が残ります。



瓦に残る小津家の家紋

「購入後、営業に合わせて改装や修復を行い、現在の形になっています。『玄関棟』『大広間棟』『鶴亀棟』と3つに分けて、全館が平成28(2016)年に『国登録有形文化財』に登録されました。いい材料と高い技術で造られた近代和風建築の好例だと、建築に関わる方に誉められています」。

「玄関棟」の大きな玄関から入るとロビーや2階に続く階段があり、その先に客室が並びます。2階の廊下には宇治橋をイメージした装飾があり、客室入口にはそれぞれ庇が付けられて、屋内に街道の雰囲気を取り込んだ凝った趣向です。部屋ごとに異なる意匠で、竹や木の細工に往時の職人技の粋を見ることが出来ます。

「大広間棟」は、もともと平屋だったのですが、1階を押し上げるような形で2階建てに改装したといえます。建物全体が重厚な造りですが、中でも2階の110畳の大広間は圧巻。巨大な床柱や豪華な織り上げ天井、繊細な欄間や書院など、見どころが満載です。取材に邪魔した時には、この床の間ならではの大きな九鬼嘉隆の肖像が掛けられました。これは明治から昭和に掛けて活躍した日本画家、川口 呉川ごせんの作。初代の主・阪本菊次郎さんが呉川と懇意であったことから、ここには呉川の作品が多く残されているそうです。

また、「玄関棟」の南側に立つ「鶴亀棟」は、10畳の「鶴の間」と8畳の「亀の間」の二間続きの平屋で、本来は庭の奥にありましたが、現在の位置に曳き屋を行って移動したそうです。主の書斎として使用されていた建物で、小津家の別邸だった頃の雰囲気が最も多く残っています。長い廊下の長押が継ぎ目のない一本の材であったり、書院脇に家紋を彫り込んだ繊細な欄間があったり、ぜいたくな造りでありながら品の良いのが印象に残ります。



街道の雰囲気を取り込んだ廊下



部屋ごとに違う意匠が凝らされている



大広間 大きな床の間に立派な掛け軸が似合う



「鶴の間」は落ち着いたたたずまい

武家の町に豪商が建てた家。長い年月を経て、多くの市民や旅人の思い出の舞台となりました。文化財の中で食事や宿泊ができる数少ない場所です。

お問い合わせ

割烹旅館 八千代

TEL 0598-21-2501

真珠とともに美しい伝統と歴史を重ねる

松井真珠店



格調高い店舗正面。昭和4(1929)年頃の建築

始し、賢島が観光
開発されました。

松井真珠店は真珠
の生産地で小売業
を営んだ、最初の
例とされています。

「海の前ですし

台風被害は避けられず、雨戸や戸袋などの修理を職人さん
にお願いしていますし、定期的な点検も
欠かせません。ちょうど大規模な修繕
が終わったところで、役所から文化財登
録の声をかけていただきました」と松井
真珠店4代目店主の松井良友さん。



開業時の写真、眼前に賢島港※

老舗の風格が漂う店構えの「松井真珠店」は、船が停泊する賢島港の真ん前にあります。1階の開放的な格子戸にかけられた下屋の瓦の上で、大きな看板が真珠専門店としての威厳を保ち、また2階窓の手摺には松の図柄がくり抜かれています。

松井真珠店は明治38(1905)年、英

虞湾に面した志摩町布施田に創業。当初は天然真珠を扱っていましたが、大正12(1923)年より半円真珠の養殖を開始し、賢島に店を構えたのは昭和4(1929)年のこと。その年の5年前、大正13(1924)年に鳥羽から磯部、鶴方を経て賢島に至る路線の免許が下され、昭和4年に志摩電気鉄道が営業を開

始し、賢島が観光
開発されました。
松井真珠店は真珠
の生産地で小売業
を営んだ、最初の
例とされています。
「海の前ですし
台風被害は避けられず、雨戸や戸袋などの修理を職人さん
にお願いしていますし、定期的な点検も
欠かせません。ちょうど大規模な修繕
が終わったところで、役所から文化財登録の声をかけていただきました」と松井真珠店4代目店主の松井良友さん。
「国登録有形文化財となったのは、真珠販売の店舗と蔵です。店舗は木造2階建て、寄棟造りの棧瓦葺きで、店舗に並んで建つ蔵は鉄筋コンクリート造2階建ての商品倉



昭和26(1951)年建築の蔵

庫。切妻屋根や出格子窓の土蔵風外観が目を引き、地域の産業を象徴する建築です。平成11(1999)年からは「賢島美術館」として展示などにも利用されています。近鉄賢島駅の向かいで特色ある景観をつくり出し、店舗は映画シリーズ「男はつらいよ」の39作目の舞台として使われたこともあります。

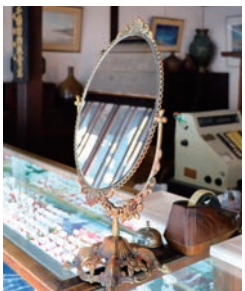
店のショーケースに並ぶのは、アンティーク調で独創的なオリジナルジュエリー。商品の一つひとつに高い品質を誇り、老舗としての責任の上に努力を重ねています。質とデザイン性が高く、年配から若い方まで全国のファンの支持を集めています。



帳場の雰囲気そのままと展示

店内に置かれたランプや鏡など装飾品も、アンティークなものばかりで目を奪われますが「古いところで大事なものは、うまくきれいに整えて、常に清潔にしなきゃいけないことです」と松井さん。室内の明かりはLEDを導入しました。「配電盤を変えて軽量化もできましたし、発熱量が少なく火災の心配も減りました。年代物の建物とつきあっていくには、うまく現代科学と調和していくことです。掃除にはコードレスの

アンティーク調の備品が並ぶ



LED照明を導入し明るい店内

サイクロン式クリーナーが役立っています」と歴史的建造物を扱っていくコツを教えてください。
取材時には帳場横の正面階段に、雛人形が飾られていました。ここが松井さんの番のお気に入り。店に入ると目に飛び込んでくる場所です。「仏教建築と同じで、奥行が出てバランスがいいんです。お寺は見せ方や感じ方が計算されていて、徐々に見せたり、遠目で楽しませたりと変化をつけ、まるでアトラクションのようです」と松井さんは声を弾ませます。人から長く愛される土地や商品であり続けるには、変化を恐れないことも必要だと話されます。この地に根を下ろして以来、真珠を見極める厳しい眼と時代に添ったアクセサリーづくりの精神が、伝統に培われた建物を守る役割も担い、松井家4代にわたって受け継がれています。

お問い合わせ

松井真珠店

TEL 0599-4311015

※印の写真は取材先から提供していただきました

代々続く林業家の風情ある佇まいたなす

長井家住宅(梅屋)【紀北町東長島】



江戸末期の主屋と内堀によって囲まれた閑静な中庭 ※



鬼瓦には梅鉢の家紋 ※

紀北町
東長島、
長島港が
近い閑静
な住宅街
にある長
井家は、周辺のコミュニティで「梅屋」の屋号で通じています。主屋の立派な鬼瓦には、家紋の梅鉢がかたどられています。「梅屋」は多気町丹生の出身です。北畠藩に仕えたことから褒美に梅鉢をいただいで、それから梅屋という屋号になったと聞いております。江戸時代にこの二郷村(東長島)にやってきてから、両替商や質屋、薬屋をしてきたようで、蔵には看板が残っています」と主の長井武彦さん。「梅屋」は紀州

藩の領地で庄屋を務め、江戸末期から現代まで地場産業である林業を営んでいます。
広い敷地内の主屋や正門、蔵に女中部屋など12件の建造物が、令和3年、「国登録有形文化財」となりました。「江戸末期の風情がそのままの状態であり、現在も長井さんがここで生活し、使われていることに意味があり、登録を推薦し、所見を作成しました」と一級建築士で三重県文化財保護指導委員の宮原良雄さん。
敷地のほぼ中央に建つ主屋は、切妻屋根の木造平屋建てで、使われるのは主に梅材(まがひ)。また四方が無節(むぶせ)の吟味した良材が多く使用されているところは、さすが林業家の家屋です。和室の床の間や欄間、網代などのしつらいが目を引き、釘隠しの鋳物も凝ったもので、部屋ごとに形が違い、職人の遊び心が散りばめられています。「ここを建てたのは宮大工で、寺院の建築様式と似ています。また柱は礎石という石の上に載せているだけです。建物の重みで安定し、地震時は

地盤の揺れとは切り離される一種の免震工法です。昔の工法はそれなりの知恵がこもっていたんですね」と宮原さん。
趣のある景観の離れは、寄棟屋根の棧瓦(がらふ)葺き。2階の茶室6畳は、数寄屋造りで簡素な美しさがあります。
商人としての大切な蔵が3つあります。南蔵は家財用、東蔵は農業用倉庫、西蔵は日常的な用具を保管する倉庫として使用されました。南蔵へは主屋から渡り廊下でつながっていますが、土壁に格子窓(こうし)を開け、庭の景観と一体化し、落ち着いた雰囲気を出しています。ほかに事務所棟や使用人が休憩するた

めの部屋、商売繁盛を願う稲荷社など、家業に関わる建物が並んでいます。
敷地の一面にテニスコートがあります。「山の苗木を育てる畑だったんですが、50年ほど前にコートを一面つくりました。地面は砂利で水はけもよく、J.Rの石炭殻をもらって敷き詰められたんです」。週末になるとラケットを手に人々が集まり、ご近所さんの憩いの場所になっています。また庭のソメイヨシノは見事な枝振りで、桜咲く頃にはお花見ツアーが組まれることもあります。長井家の佇まいと合わせて、見学客の評判もよく、数年続いたようです。

周辺の漁師町や片上池のウォーキングコースのポイントに長井家加わるのもいいと、今後の展開を話す長井さん。歴史ある建物に住み続けることに、悩みもあります。「雨漏りが見つかって頭を痛めます。建物の狂いは少ないですが、ふすまが閉まりにくくなったり、実際に住むとはそういうことです」。
歴史的な資源を活用し、長く地域に残されるよう、価値が高まることを期待します。

お問い合わせ

紀北町教育委員会 生涯学習課
TEL 0597-4613125



ヒノキ製の正門は石積みも立派 ※



床の間を持つ主屋の和室 ※



使用人の部屋の入り口上に無双窓 ※



南蔵へと続く渡り廊下 ※



稲荷社と江戸末期の南蔵 ※

※印の写真は紀北町教育委員会から提供していただきました



手前が大広間棟、奥に別館。名張川との間に堤防道路

初瀬街道に面した本町通りに、瓦屋根の重厚な門構えが目にとまります。ここは江戸時代から営業していた旅人宿で、初代名張市長の北田藤太郎さんの一族が経営していました。屋号は「北出屋」から後に「喜多藤」と改名し、名張川沿いに建つ料亭旅館として隆盛を誇り、結婚式の披露宴会場としての利用もあり、市民にも親しまれていました。表門を抜けると、正面に別館の玄関が見えます。別館や大広間棟など、大正から昭和初期に建てられた7件が有形文化財に登録されました。昭和56(1981)年の廃業から40年ほどが経



本町通りに面した正門

ち、現在は誰も住んでいませんが、藤太郎さんの長女・松田和代さんと夫の博治さんがここに通って保存に努め、維持しています。

「昔は『張江丸』という船も所有していました。目の前の名張川に船を浮かべ、川床に芸者を呼んで遊んでいたのでしょうか。閉館前は宿泊の利用はなくなり、お能の会や三味線、お琴の会などの会合やお茶会に使われ、結婚式はだいたい100人規模で行われました。大広間は2部屋をつなげば64畳ありますから」と和代さん。

登録調査を担当した「みえ登録有形文化財建造物の友の会(さんとうぶん)」事務局長の岩見勝由さんは「名張の町に

これほどの規模で栄えた旅館は現存していません。保存状態も良く、当時の姿が残っています」と話します。

江戸期は名張藤堂家の陣屋町、そして初瀬街道の宿場町として発展した名張。昭和初期に鉄道が開通し、大阪との往来が便利となって賑わい、「喜多藤」にも作家の田山花袋や関取の初代若乃花といった著名人がたくさん訪れました。昔のアルパムでは、川にせり出した縁側に芸者たちが集い、華やかな風情が漂います。現在の名張川は、氾濫を防ぐための堤防道路ができて、景観はがらりと変



芸者を集めた縁側での写真※



渡り廊下でつながる「翠明荘」



「臯月寮」は4帖間の茶室建築

わっています。

大正11(1922)年に起工式が行われた別館は、1階が泊まりの客室、建物中央には洋風の意匠を取り入れたダンスホールがあり、どちらも趣味性の高い造りとなっています。迷路のような館内を歩くと、外廊下でつながる「翠明荘」に出ました。半円をくり抜いた漆喰の壁が洒落ています。「あの場所は芸者さんと一緒に写真を撮るスポットでした」と和代さん。隣には茶室の「臯月寮」が建っています。

玄関に戻り、幅が広く取られた階段を

上ると、右手に大広間棟があります。折上格天井に色漆喰壁を用いた贅沢な大広間は、別館同様に川沿いの眺望を誇ります。今は旅館の調度品や着物、それに多数の雛人形が持ち込まれています。

別館を出て、敷地の東に建つ離れへ向かいました。ここは入口を表門とは別にする独立した客室「艶秀亭」で、個別に出入りすることができます。内部は和室4室に洋室で、部屋ごとに違った窓をつくるなど、趣向を凝らしています。かつては一番奥の客室で、北田家が生活をしていました。

「これほど大きな敷地ですし、建物は古くなればなるほど個人で管理していくのは大変です。利用については、民泊やレストラン、貸店舗など、これから『さんとうぶん』でも探っていきます」と岩見さん。身近に存在する、風土に見合った景観が残されるよう、保全に努めています。

お問い合わせ

名張市教育委員会 文化生涯学習室
TEL 0595-1631-7892

※印の写真は取材先から提供していただきました